



記録誌『新型コロナウイルス感染症拡大期における神戸市看護大学の活動記録 2020年3月～2022年1月』を刊行します。

コロナ記録誌編集委員会

COVID-19感染拡大期には本学でも大きな戸惑いを共有し、平常とは異なる教育研究活動、地域連携等々、その時々で夢中で対処する時期が続きました。さほど時が経っているわけではないにも関わらず、2年を越えてこの時期を振り返れば、多くのことが記憶からこぼれ落ちていることに気づきます。この感染症を巡る本学のあり方について総括するには時期尚早であることを認識しつつも、感染拡大期に看護学教育の最前線では何が問題となり、どうそれに対峙したのかをありのままに記録し、記憶にとどめる冊子を近日中に刊行する運びとなりました。



コロナ禍での実習 ―急性期看護学分野での取り組み― 江川 幸二 教授

通常は急性期病院で周手術期の患者様の受け持ち実習をしていましたが、コロナ禍の状況で病院実習が困難になったため、急性期看護学分野での工夫を紹介します。

術直後はシミュレーター人形に酸素マスクやチューブ、点滴などを装着し、臨床に近い設定を行い、学生が人形相手に話しかけて教員が答え、周手術期の患者様とやり取りするのと同じような環境を作りました。離床できる状況になると教員自身が患者役になって学生に対応しました。また病院と同じように、学生のパソコンから医師・看護記録、検査・画像データなどを入れ込んだ模擬電子カルテにアクセスし、必要な情報収集を自らの判断で行えるようにし、患者記録は状況の変化に応じて毎日更新しました。感染状況により学生が大学に入構できない場合には、自宅からオンラインで患者役とのやり取りができるような工夫もしました。

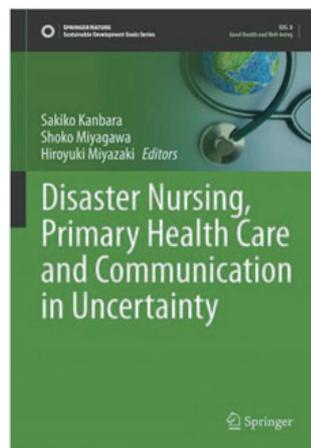
こうした工夫により、病院実習に近い環境で実習をすることができ、学生の満足度も比較的高くなりました。



災害看護・国際看護学分野からSDGsを考える

神原 咲子 教授

日本の災害看護が構築される傍らで、地域のプライマリヘルスケアの見直し、地域社会にとって「持続的にあしん」なぐらしの研究、教育、実践をしてきました。災害看護をリードしてきた南学長や諸先生方と、国連の持続可能な開発目標(SDGs)の枠組みの中で再構成し、Springer SDGs seriesとして出版し、着任早々でありましたが、国際看護師の日に、他のグローバルリーダーと横並びでブログで意見させて頂いたり、国際学術会議が出すPolicy Briefに貢献し、国連防災会議で発表も致しました。更に関連する作品は5月末にWIREDから未来ある公共財としての看護教育として審査員賞も頂きました。これは看護への社会的期待の表れです。中核的課題は、リスク低減と健康増進を人々のWell-beingに紐づけること、社会がCOVID-19の教訓として看護科学が文理融合をリードすることと思います。今後は、みなさんとともに、いちかんダイバーシティ看護開発センターを有する本学だからこそできる国際的学際的な連携、協働に尽力したいと思います。



～2021年度国家試験 合格おめでとう～

看護師
99%

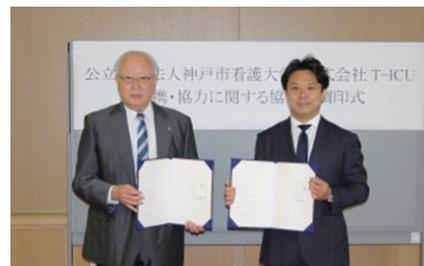
保健師
100%

助産師
100%



株式会社T-ICUと連携・協力に関する協定を締結

2022年4月15日、公立大学法人神戸市看護大学と株式会社T-ICUの間で、相互に協力し医療の発展に寄与するため、連携に関する協定締結の調印式を行いました。調印式では、本学北徹理事長と株式会社T-ICU中西智之代表取締役社長による署名交換を行いました。本協定に基づき、今後、互いに有する人材や技術、知見を活かし、遠隔ICU及びクリティカルケア看護の発展に関する事項等に連携協力し、国際社会に貢献できるよう産学連携を深化させていきます。



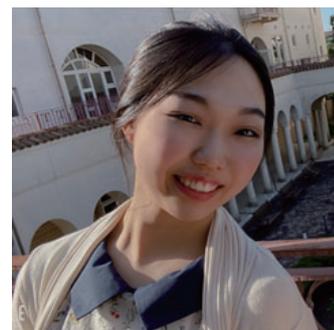
修了生からのメッセージ

淀川キリスト教病院 島田 悠祈

本学を修了し助産師2年目になりました。学部時から病棟のみならず、地域で暮らす人々との関わりを通して、健康やその人らしい生活とは何かを考え、看護は地域や生活、そして人生に繋がっていることを学びました。大学院では女性を主体としたお産に携わり、助産師がそばにいることの意味を指導者さんの姿から学びました。またダナンやラオスの海外研修で、自分とは違う文化や言語を持つ人々とコミュニケーションを図れたことが、今の臨床で外国人患者さんへのケアに生きていて感じています。

臨床に出て、実習の出来事を思い出す機会や、今だからわかる指導者さんの言葉が多くあり、「いちかん」での実習経験は、今につながる学びだったとしみじみ実感しています。

COVID-19流行下でも実習内容をほぼ変更することなく実施しました。これは、本学の先輩方が真摯に実習に取り組み、多くの卒業生が神戸市内・兵庫県内の病院で活躍していることが温かい理解につながったのだと感謝しています。そして今、大学でしっかりと鍛えられた“何のために、何を目指して対象者と関わるのか”という看護・助産観や、それを実践するための思考過程をより深めていこうと努力しています。臨床で日々出会う妊産褥婦さんが、より健康に、より主体的に妊娠・出産・育児に臨めるように関わっていきたくです。



学長 南 裕子

約2年半にわたる新型コロナウイルス感染症拡大も高止まりとはいえ「With コロナ時代」の模索が始まっているように思えます。「復興文化」という考え方がありますが、コロナ禍の中から学んだものを生かして次に進む時がきているということでしょうか。そのためにまず記録誌「新型コロナウイルス感染症拡大期における神戸市看護大学の活動記録」を公開します。ここには本学の学生、教職員の一人一人が、そして一同が力を合わせて取り組んできたことが記録されています。また、国をあげて新たに取組もうとしている事業のなかで、教育におけるDX化の課題やリカレント教育の拡大などにも果敢に挑戦し予算を獲得しました。感染拡大の前にはもう戻れない時代にも対応できるよう前進してまいります。